アカネ差すキミ

川中流一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アカネ差すキミ

【Ｎコード】
Ｎ０８０２Ｑ

【作者名】
川中流一

【あらすじ】

『あ、間違えた』

――縁結びのカミサマに、親友（美少女）の代わりに飛ばされたのは、なんか違う歴史の西暦１８５５年日本。貴族だとかいう仏頂面のイケメンと一泊二日恋愛トリップ！

～プロローグ～　祇園精舎の鐘の声

アカネ……

……アカネ――

「茜！！」

「ひょぉ！？」

ばふ、と起きる。

その瞬間、大爆笑。

クラス中、バカ男子はゲラゲラ、女子はクスクス笑っている。

――あー、取り敢えず何の授業中だか誰か教えてくれる？

昼休みにメロンパン買い占めるに成功してから爆睡して――

……仕方ないよね、購買ダッシュ＆ａｍｐ；奪取・て結構体力いるんだから。

あ・あと買い占めるって言っても、たかだか８個程度だから。

昼３、部活前後に各１、帰宅中の電車のホームと徒歩で２、夜食１と考えれば結構普通でしょ？

あ・そういう目で見るの、やめてくれるかな。

置いてある数の少ないのが悪いんだ！！

「茜、茜、帰ってこ――い」

隣りの葉那がつんつん引っ張る。

なんの話だっけ。

「もうっ……奇声発してないで。ほら、茜今日ここ当たってたでしょ、訳」

つんと指差すは、「古典？」に所蔵の平家物語とやら、その初行。

あ―今日から新しいとこ入んのね。

で・その訳を初っ端から当てられていたのが、出席番号一番、この今村茜という訳ですね！

状況理解。

「今村さん、読めますか？」

先生の声に、はい、と立ち上がる。

読めますとも。私を誰だとお思いで？

「祇園精舎の鐘の声、諸行無情の響きあり。

娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす――」

すらすらと朗読してはすとんと座った。

どや！

「今村さん……訳は？」

「すみません、分かりませんでした」

第1話．エンムスビの神様

「全く……訳してないのにドヤ顔で立たないの。それにしてもよくもあれだけ堂々と朗読できるよね、茜は。逆にその度胸に尊敬するよ」

はあ、と溜息をつく葉那。こういう皮肉は私に対してだけで、クラスじゃ美人で通ってる。

いやまあ実際美人だけどね、顔は。

「だって、『読めるか』って言うからさあ。そりゃ読めますよ？」

「言い訳しない」

ぴしりと言う。

此処は弓道場。はい、部活です。ちなみに恐らく親友と言ってそんなに嫌な顔をしない彼女は、一年にしてエースです。インハイ行ってます。

「ねえ今思ったんだけどさあ」

「何？」

「今日人いないねー」

「……」

放課後もう練習開始時間なのに、人がいない。葉那が呆れた顔をしているのは何故か。

「今日、部活休みでしょ」

＊＊＊

「ああそうか、テスト休み。成程、ということは今日で期末までと一週間ということも意味しますね」
「も、ていうかそれ以外を含まないでしょ。遊ぶ為にあるんじゃないからね？」

制服に着替え直して弓背負って二人、歩く。

「でもさあ、葉ちゃんだって弓持ってきてんじゃん。実は忘れてたでしょ？」
「茜が昨日教えてよ、て言うから自主練するのかと思ったのよ」
「君、付き合いいいなあ」
「面倒見がいいと言って」
それから葉那は首を軽く傾け、くす、と流し目でこちらを見た。
「ね、どっか寄ってく？」

――美人さんにこう言われて断れるはずがない。

彼女の家は、でかい。はっきり言ってお嬢だ。
それも成金とか社長さんの娘とかじゃなくて、旧家の子女。
学校で表彰される弓道の功績も、部活熱！によるものではなく、幼少からのたしなみの延長線にあるに過ぎない。

だから彼女は結構高嶺の花という感じで、なんで私のような芋女子、略して芋女（訳す必要は特にない）と仲良くしてくれるのかは謎だ。まあ美女の彼氏ってイケメンじゃないことも度々だしね。きっとプラスプラス2よりプラスマイナス0の方が磁場的に安定するんだろう。磁場ってなんだ。まあいいや。

「葉那はさー、興味ないの？」
「何に？」
「カ・レ・シ、とか」
「……」

綺麗な切れ長の目を丸く開いてびっくりしている。

「え、何？」

なんか変なこと言った？

「いや、茜もそういう話するんだ……」
「ちょちょ、失礼じゃない？葉那さん？」
「あ、ごめん」

軽く笑うがしかし悪気なく、畜生可愛いから許す。

「これでも日々訓練してるんだから」

そうなんだ、と感心するように言うから、シュミレーションゲームで・とは言いそびれた。通称乙女ゲームとも言われる。

「ねえじゃあさ、葵神社に寄ってこ！」

葵神社とは帰り途の駅までにある小っさい神社だ。

「……なんでそこで神社？」

「縁結びでしょ！」

華やかに笑う彼女。
ここで駅前のコスメショップなどという方向に向かわないのは、やはり類友というものでしょうか。
いいや、自惚れてはいけません。彼女は天然なだけなのです。

第2話．二次元上等！

葵神社。
ここが縁結のゆかりがあるとは初めて聞くが、まあいい。

「葉那はさー、タイプってあるの？」
「え、」
ちょっと照れるがまんざらでもなさそうに葉那は答える。
「優しい人かな。あ、でも草食系っていうのじゃなくて、男らしくないとだめ。実は優しい、て感じの」
「無愛想だけど私にだけは笑ってくれるって感じの？」
「ん……あと、引っ張っていってくれる人」
「よしよし、俺様系のツンデレね。丁度いい人いるよ。紹介してあげる」
「え！？」

驚くのも無理はない。何を隠そう私は彼氏いない歴17年、男の影など一つとしてない清純潔白な乙女である。
サビシイ女、などと誤解しないで頂きたい。
現実カレシなど必要ない！　私には私の青春があるのさ！　青春街道、外れて曲がって爆走上等！

「葉ちゃんだから、特別だよ」
人差し指を口につけてにっこり。

「最近ネットで見つけたばっかで私もまだ攻略してないんだけどね――――」

あれ。

ちょっと、なんで早歩きになるんですか葉那さーん？
この人他人ですみたいな。
「ねえ、譲ってあげるから！　あ、でも二人で同じ人っていうのもいいよね。情報交換しあって――」
「ごめん、ついていけない」
さらりと言われた。
「ねえ、二次の何がいけないの？　次元を超えた恋じゃん、浪漫じゃん！」
まるで聞く耳を持たずに行ってしまう。
仕方ない、親友を勧誘するのは諦めよう。
冗談冗談、と半分の嘘をついて隣に歩調を合わせる。
「茜は？好み」
「イケメン」
この一言に尽きる。
しかし非難の前によく考えてみて欲しい。この条件さえクリアしていれば、性悪でも「腹黒イケメン」、エロくとも「セクシーイケメン」と結局は萌と成る。
「嗚呼何も言わないで、分かってる。うちに鏡はあるから。だから二次なの。現実なんて、そんなおこがましい」
「茜は可愛いよ」
いやいやいや。この子。

白い肌、整った顔、なんかいい匂い。そんな綺麗な瞳で直視されたら、

「なんて可愛いんだ！」

うがああと叫んでからその本殿へ。

「ささ、茶番はともとしてお参りしましょう、お願いしましょう、神様神様彼氏プリーズ」

敬意のこれっぽちも感じられないスキップで境内を行き、賽銭箱の前に立つ。

ほら、と促して二人並んだ。

五円、取り出してぽいと投げてはからんからんと大鈴鳴らす。

二礼二拍手なんだっけ？　ご丁寧になにやら厳粛な様で礼をしている友をさておき。

目を閉じてはぱんぱん手を叩く。

イケメン、イケメン……

を、えーと、葉那に――――

ぶわんと。

ぶわわわわわああ、と地面が揺れた。

え、地面？　私？　脳みそ？

何かが何かが地鳴りをあげて揺れている。

なに、これ。

視界が真っ暗？　いや紫？
捻じれてる。捻じれてる。
――――気持ち悪い……――――

『あ、間違えた』

うん、色々と、
なにがーーーーーーー――――！？

第3話．今こそ鍛えた腕を試さん時

「う、ぎゃあああああーーー！！」

落ちていた。
落ちてるんだってば！
多分。
穴的な中を延々と……
不思議の国のアリスか私は！
いやすみまっせん、自惚れました！
ごめんなさい。ごめんなさい。二拍手なんとかをやり直すから、

「助けてええぇーーーー！」

光。
ああ、穴を抜けた。
そして。
地面が見えた。
黒い岩？
激突コォォォース！！！

「あああああああーーーーっ」

真っ逆さまに。
黒い点が大きくなる。
ばばばすすすんん。

衝撃。
そして衝撃の事実。
黒岩に見えたのは、全く別のものだった。
見上げて一言。
「なんだ、ただのイケメンか」

望まぬ飛び降り自殺的死から私めを助け、受け止めてくれたそのイケメンもとい恩人は、どさりと私の体を地に落とした。
あ、ひど。
確かにほっとした余りに言葉が滑ったけどさ、もっとラピュタ的な方向を味わってもよくない？
て、いうか私……
「順応してる場合か！　夢小説読み過ぎだあ！」
「……」
見下ろすその黒い瞳。まあ一言で言うと、ひたすらに微妙な表情をしていた。
ギュルルルウウ
答えたのは、腹の音。だって部活なかったからまだメロンパンを食べてないんだもん。

そう、女の子らしくいる為にもあれは必須のアイテムだったのだよ。うん、今こじつけた。

真に残念かつ呆れた風に、はあ、と一つ嘆息したかと思うと、くるりと背を向ける。

「いや、待って！　プロローグ⇒異世界突入⇒出会い＝ゲームオーバー　はなくない！？　相手と言わず、初めて会う人物は大体キー人物だからちょっと待ってよ！」

順応してない。してないよ。訳分かんないよ？　だけど伊達に二次元に通ってない。

この展開、本能的にまずいと分かる。例えばここでゲームオーバーになった場合どうすんの？　リセットはどうやってすんの？　てか選択肢一個も選んでないんだけど。いや、ああ、あれか。

キュルキュル。

A．『あなた……誰？』　B．『助けてくれてありがとう』
C．何も言えず、泣き出す。
D．（欄外）『なんだ、ただのイケメンか』（＝ゲームオーバー）

しまった。ゲームは既に始まっている。

なんの躊躇いもなくすたすた去っていく無愛想イケメンの背に叫ぶ。

「あなた……誰！　助けてくれてありがとう！」

しかし無情に華麗に無視。そうだ、もう次の場面だ。次の選択肢

次の選択肢……

て、ちょっと！　ズームアウトしたら終わりでしょ。　仕方ない、自分で画面（男）を追いかける。

追いかけてはその服端を掴む――もうとしたが、ひら、と躱わされた。悉く酷い。

「気安く触るな」

――――これが第一声でした。

例え美声でも許すまじ。

もういいや、こいつ。次に現れるイケメン（未定）を待とう。

「みたらしと餡はどちらがいい？」

第二声。

「――――――はい？」

「腹が減ってるんだろう？　団子を買ってきてやる」

あ、こいついい奴だ。

第４話．メロンパンは正義

「あ。メロンパンあるんで大丈夫です」

団子を買ってくるという男の申し出を遠慮し、鞄から取り出したそれを心配させないようむしゃむしゃと元気よく齧りついて見せる。

もしゃもしゃ。

ただ腹が減っていただけとも言える。

「……」

神社の階段に座って、二人。

自己完結した私を放って、男はあらぬ方向に目をやっている。

茜色の雲を渡りゆくカラスかな。

ところでここはどこ。

――――から入って行きたいところだが、既にそれについては解決している。

此処は、あれだ。

葵神社だ。

全く同じ境内。

同じ夕日。

同じ場所……？

――――じゃあ。

「葉那は！？」

「はな？」

男がちら、とこっちを見た。

「すみません、こっち見ないで頂けませんか」

本当、その流し眼心臓に悪いから。

やばいよこの人。

凄い綺麗な顔してる。どこの事務所の人だろう。

こんな女の子と隣に座って、激撮されたらどうするんだろう。

幾ら人気（ひとけ）が少ないからって。

――――人気が少ない！？

いやいや、何考えてんだーー！

それより葉那。葉那。はなはなはなは那覇？

ちらと男の方を見ると、今やこちらに顔を向けていた。

ぎゃーーー。鼻血、出ます。

「……」

微妙に憐れむような表情。

「今、変な奴だとか思ったでしょ！？」

「悪い、顔に出ていたか」

なんとも失礼な。

よしよし、しかし逆に落ち着いてきた。

レディーとして扱わないならイケメン扱いしてあげません。
「本題です。もう一人女の子を見ませんでしたか。お前は女の子に入るのかという問答は省略の為抜かしてください」
「見てねぇな」
「おやおや」
勝手に異世界だーーとか突っ走ったけど、あれは幻覚かな。
このままいくと夢落ちかな。
欠片となったメロンパンを最後口に放り込んで、あむ、と飲み込んだ。それに合わせて男が立ちあがる。え、メロンパン食べ終わったら行っちゃう仕組み？
「ちょっと待って。もう一個あるから！」
「別にお前が食い終わるのを待ってた訳じゃねぇよ」
なんてすげない。
いや待てよ、『待ってた訳じゃ、ないんだからね！』と読み替えればツンデレとも言えなくもないか。
「じゃあほら、一緒に食べよう！」
一個渡す。まだ三個残ってるし。
そして意外にも素直に受け取って、とたんとまた腰を落とした。
しげしげ見ている。

「メロンパン嫌い？」
「いや、食ったことはねぇ」
ああ、こんな美味しいものを食べたことのない日本人がまだこの世にいたなんて！
「外来のものか？」
ん。
んん！？
別にさ、高校生くらいの和服男子がいたって不自然だと思わないよ。
葉那の家なんて、皆ほとんど和服でお母さんも着物だし。
けど可能性ってのはあるよね。
あの神社での揺れと墜落が現実だとすれば。
「ここって何時代！？」
「――――現代じゃねぇのか？」
一拍間を置いて、男は怪訝な顔で答えた。
ああ、はいそうですよね。
トリップしてるのは私のアタマです。
駄目だ。これじゃ完全に頭が可哀想な人だ。
「お前、大丈夫か？」

ほら。もう、涙出ちゃう。だって女の子だもん。

第5話．世知辛い非現実だぜ。

「大丈夫です」

男に頭の心配をされた私は、気を強く持ってできるだけしっかりと返事をした。

もう家帰ろう。

その前に葉那に連絡しなきゃ。でも自分から誘ってきたのに私を置いて帰るなんて、葉那も結構酷いよね。

携帯、携帯。

ごそごそポケットをまさぐって、しかし圏外。なんでやねん。

まあいいや。地震の影響でしょ。

「では私はこれで」

「おう」

とぼとぼと鳥居を出る。

「――――っはあ」

よくわかった。

出会いが欲しい出会いが欲しいって言うけどさあ。

万が一にもイケメンと乙女ゲームばりの出会いを果たしたとしても、現実こんなもんだよ。

大したこともできずすごすごと分相応に自ら去るのさ。
お前らよおく目に焼き付けろよ、この無残で虚しい夕焼けの長い影を！
これだから三次元は！
「あしーたがあるーさ、明日がある。わかーい僕らには明日がある……」

鳥居を出て、衝撃的なことが分かった。
真に申し訳ありませんが、振り出しに戻ります。

――――ここ、どこ！？

そこは見知らぬ景色が広がっていた。
道がない！
正確に言うと、道路が。
コンクリートが剥かれて、土の地面が広がってる。
視界が開けて、田んぼに畦道。
遠く、この人口過密の日本には悠々すぎる間隔で藁ぶきの屋根がちょこちょこ並んでる。
視力１．５。髪結いあげてぼろの着物着た人達。
いや、着物って言ってもあういう華やかなんじゃなくて、そう、史料集に乗ってそうなやつ！
農民！農民！

いやあああ。
何、この古き良き日本！ほんとそういうのいいから！

目の端に移った緑色の物体。それは足元。両性生物。

「ゲコ」

「いっやあああああああーーー！！」

もと来た道を全力で走った。

だめなんだ、シティガールだから、だめなんだ！

「ごめんなさい、神様！」

元に戻してください、と念じ念じながら鳥居をくぐる。

大丈夫、いいことしてないけど悪いこともしてない！

神がいるなら戻してくれるはず！

とん、と誰か肩がぶつかって、目を開けた。

「葉ちゃん！？」

違かった。勢いよすぎた所為かちょっと驚いた様子の、先程の男がいた。

涙が出そうになりながら、がっと両腕に縋って聞いた。

「今、本当に西暦２０１１年！？」

「西暦……」

男はふと目を伏せた。おい睫毛！色っぽい！

じゃなくて。

「西暦１８５５年だ」

「う、そ……」

明治時代が１８６８年からだから……江戸時代末期？

にしてもなんか、中途半端――――。

頭の隅で突っ込みながら、涙でへなへなと崩れた。

第6話．ペリーが浦賀に来たのは１８５３年

「西暦１８５５年！？　さっき現代って言ったじゃん！」

男は困惑した顔をしている。それから、は、と気がついた。

「そっか……現代か」

私でも、今何時代って聞かれたら平成時代なんて答えないよね。
その時代の人達に取ってはいつでも現代じゃん。

「この国の者に見えたが……太陽暦を使うということは、お前は異国人か」

「太陽暦？　え、なんか違うの？」

「この国では太陰暦を使っている。月の満ち欠けによる暦だ」

「でもさっき西暦で答えたよね？」

「計算した」

あ、それでさっきの一瞬目を伏せた間。てか凄っ。一瞬で計算できるもの？
この時代の人が、普段使ってない暦との換算とかさらっと心得てる訳？
学者か、この人。若いけど。
高校生……いや、大学生くらいの年か？

「お前。何故俺の名を知っている？」

ちょっと睨むように男が見る。睨むというか警戒心？

だがしかし。

「いや、知りませんけれども？」

「そうか？」

微妙に納得いかない風だったが、こちとら身に覚えもない。発した単語の中に名前があったのか？

男がぐいと手を掴んだ。

ちょっと。だから鼻血出るってば！

免疫ないんですよ、お兄さん！

「離してよ！」

しかし黒の瞳が険しい。

「異国人は出島から許可なく出ないと取りきめをしている筈だ。条約違反か、それともお前がならず者か。とにかくこのまま捨て置けねぇ」

な、なに鎖国？　まだ鎖国中なの？

ペリーさんまだいらっしゃってない？

まあどちらにしても。

「異国人じゃないって。ほら、どう見ても日本人でしょ。この滑らかな日本語」

「……」

男は考え深げにじっと見ている。

制服、まずいなあ。この格好が説得力を阻害している。

「――――よし、」

手が外れた。よかった。ちょっと惜しいけど、罪人扱いは困る。

「家に連れて帰る」

ええええ。

なんでそうなった？

第7話．慶喜さーん、どうしますか、コレ

「気に食わねぇが止むを得ない。裁断は親父にさせよう」

そう言ったかと思うとやはり手を引いて行く。

おいおい。

「なに、君のお父さん偉い人？　政府？　いや幕府か」

「ばくふ？　何を言っている」

「えーと、一番偉いのは徳川……様だよね」

「……お前、やはり異国のものだな」

思い切り訝しい目で見られた。

なんで！？

どうした日本！？

＊

ねぇこの広大な塀は何？

高くて白い塗り壁が果てしなく続いているんですけど？

視力1．5にも霞むんですけど？

その門らしきところ。
いかつい人たち。ねえ、まさか。家ってまさか。
「あ、お帰りなさいませ、若様」
きたあああああ。
イケメン、頭良し、金持ち。
その三拍子。これで嫌疑がかかってる身じゃなければなあ。
仰々しい大門が開く。
通った後に、
「他の裏門にも若様はもうお帰りになられたと伝えに行け」と聞こえた。
裏門！？　あれで！？　そして他にもあるんですか。
「しかし先程若様が連れていたあの変な服の女は入れてよかったのでしょうか。あのように腿まで見せてふしだらな」
「まあそれについては若様も男だ。御趣味にまで口出しをするな」
ちょ、なんか変な誤解を。
そして趣味悪いって傷つくんですけど。
これが現代女子学生のナチュラルです！
こんな美形と釣り合ってたまるか！
――一応旦那様にはご報告申し上げるか、というのが微かに聞こえた気がした。

＊

部屋。ベットと机だけある。簡素でだだっぴろい部屋。
多目的ホール（小）？

「ねえ、もしも変な疑いがかかったらどうするの？」
「身元を調べる」
「……身元が分からなかったら？」
「拷問」
「なんで！？」
「当然だろう。異国から忍んだ間者かもしれねぇからな」

女スパイ！？　なんかかっこいい。

「……まあ、ただの馬鹿に見えるんだけどな」

ぼそ、と聞こえてにやついた顔を引き戻す。

「ちょっと！　声に出てる、声に出てる。えーと、あれ……名前は？　あ、あたし茜！」

「お前に名乗る義理はねぇ」

くそう。名乗り損かよ。

間もなくして、部屋に扉を叩く音がした。
拷問とかいうから思わずびくりとしたが、入ってきたのは執事さ

ん。え、執事さん？
なんかテレビのドラマで見る執事そのものみたいな洋服を着ています。
どうなってるのか、江戸末期の日本はカオスだ。
いや嘘だろう。
日本によく似たどこかな世界じゃないのか？

「着ろ」

ぼすりと投げられた。それは先程執事さんが持ってきたもの。
広げてみると着物だった。

「その変な格好じゃ余計怪しいぜ」

おっとお。

「つまり助けようとしてくれてるんだね、君は」

「……」
男はちょっと考える素振りをしたが、特に何も答えなかった。

「で、更衣室は？」

「ここで着替えろ」

「……はあ！？」

平然と答える男は当然部屋を出ていく素振りもない。
ぴき、と流石に血管が浮いた。

「あのねえ、オ・ン・ナ・ノ・コ、なのよ！　せめて出ていけ！」

「はっ、ガキが」

ひどい！そんな目で見てたの！
そりゃ童顔だけどさあ！

「どうせ一人で着替えもできねぇだろう。俺が手伝ってやる」

「どんだけ幼児だああ！　できますよ！」

「本当か？」

自分の手の着物をじと、と見る。

「……帯だけ手伝って」

くす、と笑った。

くそ、腹立つぞこいつ。
その品よさげな艶やか微笑も気に食わん。いや決して嫉妬じゃなく。

第8話．血の超美形家族絵図

――――結局、脱いでる間は後ろを向いているという妥協案でお互い落ち着いた。

『どうして俺が俺の部屋を出ていかなきゃならねぇ』

との発言で、この多目的小ホールがこの男の部屋だということも分かった。

いや広いには広いんだが、ちょっと期待は裏切られた。だって全然豪華な家具とか置いてないんだもん。何故か生け花が数点置いてあるだけで。返って殺風景な感じの部屋だ。

んしょんしょと。

それにしても男が後ろ向いてる中で着替えるって軽い羞恥プレイだね！

一応着物を被ってから制服のスカートを脱いだりする。

もたもたと。

散々時間はかかったが、一言も急かさずに待っていてはくれた。

こういうところはイケメンだな。

「できたよ」

着物の襟と襟をぴたりと合わせて小さく呼びかける。

反応、なし。

「あのーー帯？」

なんだ。今度はこういう羞恥プレイか。
そろそろと近づいて、顔を覗く。
「――――こいつ……！」
――寝てた。
お美しい寝顔ですこと――って、
興味無いってか！興味ないってか！
背後の衣擦れ音に心臓が早くなる年頃じゃないのか！お前は！
一人羞恥プレイかよ！
あたしのドキドキを返せーーーーーー！
その脳天に向けてぶわ、と鉄拳をあげる。
「起きろおおっ」
とん、と掴まれた腕。
どんな瞬身か、寝起きとは思えない機敏さでそこに立っていた。
「なんだ、もう着替え終わったのか」
「君がすやすやと寝てる間にね！」
「寝てねぇよ」
馬鹿か？　みたいな呆れたその目。もう慣れてきたよ。

「帯、結ぶぞ」
「あ、は、はい……」

流石にこれは照れるぞ。
後ろにいるけど、凄く近い後ろにいるんだけど。
手が腰に触れるんだけど。
前から手が見えます。男の人にしては綺麗な、細めの指です。

「ぎゃーーーー」
えろい！えろい！

「おい、動くな！」

ばたん

ノック音無く開けられた扉。

「夭、何かありまし――」

吃驚した顔で、それから頬を染めて目を逸らしたその人。

銀髪。青い目の……
――――思いっきり外人さんじゃねえかああ！

なんだ、人を異人異人と。明らか異人さんが此処にっ！

というか。

凄い美人なんですけど！いや可愛い！？
外人の女のひとは皆美人に見えるけど、もう、これは、ハリウッドどころじゃないでしょ！
これ人間！？
駄目だ、もう目がくらくらしてきた。
異常な速さの心臓音。ビートハーツ！
卒倒したい。

「母さん」

な　ん　で　す　と

「天、気が早えんじゃねえか？　嫁にする気ならそういうのは急くもんじゃねぇよ」

……このひとは、まさか、多分、いや、まさか。

「――――親父」

美形の父親は、超美形。

やべぇ。なんだこの家族。もう同じ人間と名乗りたくないです。
あなた方は天上人ですか。私めが犬畜生ですか。

「着せてたんだよ」
ち、と舌打って嫌そうに。

「そうか？――まあ、お前にそんな度胸ねぇか？」

くすりと笑って近づいてくる。

いや、ほんと近づいてくるんですけど。

「へぇ」

ゆ、指が、顎に……

「中々可愛いじゃねぇか」

――血を吹いて、卒倒しました。

第9話．まあまあ、お姉さんに話してみなさいよ

……あかね……

――――あかね……

ん……デジャヴ……？

なんか、変な夢を見ていたような――

「茜！」

――ん……

「――葉ちゃん！」

目を覚ました。

「誰がようちゃんだ！」

顔を引き攣らせた男。

夢……覚めてなかった。

「あれ、私……？」

「鼻血吹いて気絶したかと思えば鼾をかき始めやがる。本当、信じらんねぇ。お前はほんとに女か？」

「あたし……どうなったの？」
憎まれ口に付き合うより自分の身が心配だ。
拷問なんて、本当にあり得ない。
「……俺が決めろって」
「よっしゃあ！」
「おい、釈放なんて言ってねぇからな？　話を聞いてからだ」
「やだ。いたいけな無実の女の子を部屋に連れ込んで、尋問とか言って何する気！？」
はあ、と大きくため息を吐かれた。

＊

ずず。
「いいお茶ですなあ」
ソファに座ってお茶。中々に憎い心づかいよのう。
男がお茶を入れる姿ってのも萌える。
「茜、お前の年は？」
「あれ、いつから茜呼び？　寝てる間になんかした？」
「くだらねぇ時間を割いてる時間はねぇ。答えろ」
ち、そんなに身密度が上がった訳じゃなかったか。

「１７」
「嘘を吐くな」
「嘘じゃないもん、学生証あるし、ほら！」
鞄から取り出してそれを突き付ける。
「西暦１９９４年生レ……？お前――」

そう、私は――

「頭オカシイんじゃねぇか」

「違うわ！」

ぐい、と乗り出す。

「未来から来たの！多分！　って言っても信じないと思うから別に信じなくていいけどね！」

男はふう、と息をつく。
「話を聞こう」

という訳でかくかくしかじかお参りしてたらこんな可笑しなところに来ちゃったんだよー、と話した。

「まあ、お前天から降ってきたからなあ……」
男が渋々と、認めるような素振りを示した。

「なんで天はあの神社にいたの？」
「おい、誰がお前に名を名乗った？」
「いや、あの美人お母さんが。天ちゃんの方がよかった？」
「お前、元の世界とやらに二度と帰れない身にしてほしいのか？」

「きゃあ、何する気ですか。止めてください（棒読み）」

ぴく、と男の口元が引き攣った。やばい。この人不機嫌にしていくの楽しい。

「自分だって茜、とか呼び捨てのくせに」
「ものに名があるなら其れを呼ぶ」
「じゃあ夭でいいじゃん」
「――仕方ねぇ。いいだろう」

この人は嘆息が多い。なんだ、若とか言われたいのか？
多分自分の名は特別だとかいう思い上がりですね。よし、何がなんでも呼び捨ててやる。

「で、なんで神社に？」
「お前には関係ねぇよ」
「あるもん。何か帰れるきっかけがあるかもしれないじゃん。協力してよ。してくれなきゃ此処に居座ってやる。夭が決めるってことは夭の責任になるってことでしょ」

「……参拝だ」

そんなに面倒をみるのがいやなのか、ぼそりと答えた。

「なんであんなに離れた神社に？　もっと近いところあったよね？」
「散歩ついでだ」
「ふ、うーーん」

にやりと笑って男を見る。

「ねえ、知ってた？　あそこって縁結びの神社らしいよ」

第１０話　ああ、成程……ってなるかああ！

「え・ん・む・す・び。　知ってた？」

「へえ」

天は無表情だった。無表情って逆に可笑しくない？

「ほお……縁結びねぇ」

にやにや笑って仏頂面の男を見る。

「知らねぇよ。――ただ、」天はぼそ、と不機嫌に、

「散歩ついで、結納相手にましなのをと思ってもいいだろう？」

ふん、とそっぽを向いた。

「結納？って結婚！？　天って絶対十代だよね、気早くない？　彼女じゃなくて？」

「彼女？　誰だ」と怪訝な顔をしてから、

「もう許嫁が決まるには遅い時期だ。直に勝手に決まるだろう」

「え、勝手に……？」

「親父曰くは自分で見つければいいらしいが、中々女に関わらねぇからな」

「ああ……それで神頼みを」

この人、不憫。まあ大屋敷の子息だもんねぇ。

「だから別にそういうんじゃねぇよ」

「でもさ、私が落ちてきた時、本当はなんか期待したんじゃない――？」

あれ、なんだろ。思いのほか言ってて哀しくなってきた。

「……お前は此処じゃねぇところから来たんだろう」

気の落ちたのをなんと読み違えたのか、ぽん、と頭に手を置かれた。

「帰してやる」

「うん……」

なんだろうなあ。この、心臓が捩れる感じ。

私が願ったように、あの時天も――――

ん……　私が、願った……ように？

『イケメン、イケメン。イケメンの彼をなにとぞ葉那に――』
『実は優しくて、男らしくて、引っ張ってくれる感じ』
『おK、俺様ツンデレね！』

【――間違えた――】

『葉那に――』

「ああ！」

思わずの大声でがたんと立った。

「どうした、茜」
頭に手を跳ねあげられて、ちょっと夭が吃驚（びっくり）する。

「そういうことか！　神よ、間違えんなや！」

「間違い？」
はあ？　と夭は怪訝な顔をしている。

「夭！　これは前向きに検討をしなければ。ひょっとすると理想のお嫁さんと出会えるかもよ？」

が、と向き直る。確認して置かなければならぬ。なんたって大事な友達だ。

「天のタイプ――女の人の好みは？」

「別に決めてねぇよ」

「あのお母さん。お母さん、好きでしょ。あの超絶美人母！」

「……あの人は別に、俺は美人だとは――間抜だし、心配過剰だし……ただ勿論、母親への感謝はしているが、」

軽く斜め横を向いて、歯切れの悪い。しかも最後の部分は若干照れてる？

思った以上の反応。おい、こいつマザコンかよ。

まああのレベルの母親を持ったら仕方ないか。全然似てないし。

「うん大丈夫。葉那も美人だし、天然だし、宿題から将来まで私の心配をするし、女らしいし、しかもお嬢だし、絶対合う！」

さらさら黒髪ストレート、綺麗な切れ長の目……

やばい、これはかなりお似合いのカップルだぞ？

結婚式って呼んでもらえるのかな。

異次元召喚？

しかし葉那、過去？　だか異世界だかよく分からないこの世界で生きていく覚悟はあるのかな。

理想の男にどこまで自分を賭けられるか、か。

「まあ　取敢えずは会ってみないとね！　お見合いお見合い」

そう言い立つ。今気がついたが着物がちゃんと着せられていた。こいつ、私が寝――いや不可抗力により気を失っている間に仕上げやがったな。

「待て。今日は遅い。明日にしろ」

「あ、泊めてくれるの？」

「仕方ねぇだろう。だがこの部屋から勝手に出歩くなよ」

え。それって軟禁。それって――

「どこで寝んの」

「……隅」

やっぱ優しくない！

第１１話．古今東西変わらぬもの――と思いきや変わるものです

「この隅で寝ろ」

ベットが大きかった。

キングサイズとかそういうんじゃなくてね、
普通のベットの……四倍以上？

王様が寝るみたいな。
いや、天蓋がかかってるようなあんな派手なベットじゃなくて造りは地味なんだが、普通の木造りのベットに三秒ほどビックライトを当てた感じだ。

それはともかくさ。

ねえねえ、これって、一応――

「同衾！」
『一つの夜具に一緒に寝ること。』ですね！？

「ほら、これを使え」

とん、と投げたがどん、と重く、受け止めるとそれは温かい。
湯たんぽだった。

「お前さ……」

「は、はい！？」

声が裏返りました。別になんの妄想中だった訳でもありまっせん。

「未来……ではどんなことを習っている？」

「ん、あ、ええとね、今平家物語」

あれ、これって歴史かな。教えるとまずいのか？

でも、この時代からするともうとっくに過去のことだし。近世じゃん。

しかし大正ロマン！　とか幕末！　とかもっと雰囲気のある時代じゃなくて、なんか中途半端なところにトリップしたなあ。いや一応幕末なのか？　来る道すがら、そんな雰囲気全く醸してなかったけど。

「平家物語か……学ぶことは変わんねぇんだな」

あ、やっぱ知ってるんだ。

ていうかなんか、もっと「おお！」とかいう反応を期待するには科学とか教えればよかったのか？

でも正直科学とか詳しく説明できないし。こいつ賢さにかまけて突っ込んだ質問しそうだからな。

「そうそう、祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり……てのね」

天は、「ん？」という怪訝な顔をした。

「栄華を誇った平家が、源氏に滅ぼされていく様を描いた室町時代の読み物だよね？」

「……はあ？」

「ん……？」

しばし見つめあう。きゃ。

そして爆弾発言投下。

「勝ったのは平家だろう」

「……えええ？」

な、なに。なにが？　え、どゆこと。

「え、それで武士の世の中が来たんですよね？　戦国時代があって結局徳川の世になって江戸に首都が……」

パニック。パニック。なんか所謂未来を変える、的な発言漏らしてないよね！？

「武士の世……」

くす、と笑った。

「神武この世に立って以来、この御世を治めているのは御上だ」

「――というのは表向きだけどな」
どこか物憂げに付け加える。

「それそれ！　天皇はずっといるよ。ただ、武士が政権を握るようになった、て話」

「実権を握っているのは貴族だ。――正確に言うと一族支配に近いな」

……まじでか。
平氏続行的な？
平家でなければ人でない？

「諸行無常か……先程の続きを言え」

「え、えーと……」
覚えてる訳ないでしょ！　と思ったがしかし鞄の中に古文の教科書が入っていたので朗読してやる。

祇園精舎の鐘の声
諸行無常の響きあり
沙羅双樹の花の色
盛者必衰の理をあらわす
おごれる人も久しからず
ただ春の世の夢のごとし
猛き者も遂には滅びぬ
偏に風の前の塵に同じ

天は目を閉じて静かに聴き入っていた。
本当に鐘の声でも聞こえているようで、綺麗でどこか憂いがある姿だった。

そして末文の余韻の後、瞼を開ける。

「風の前の塵……――覚えておこう」

ふ、と笑んだそれは不敵で、それでいてどこか物哀し気だった。

＊

その夜布団の中で、中々寝付けなかった。

どうやらここは、私の生きている日本の過去ではないらしい。
パラレルワールド……というのかな。
どこかの分岐を違えた世界。

繋がっていない。
どこまでも、どこまでも、交わらない平行の世界。
ただ一つの分岐を違えただけで――――

君は異世界のキミ。

第１２話．誰が為に鐘は鳴る

「どうした、茜」

膳で運ばれて来た朝食後、夭が微妙な顔で聞いてくる。
無愛想面過ぎて微妙で括ってきたけど、微妙な違いが読めてきた。
これは多分、心配そうにと言って差し支えないだろう。

「いや、昨日寝付けなくてね……」

「嘘をつけ。お前は俺より先に高鼾をかいていたぜ」

前言撤回。
高いびきってひどくない？　安らかな寝息でいいじゃん。

「それは夭がいつまでも起きてたんでしょ！」

「そうか、」

なんだ？　今度の微妙はどういう心情だ？

「茜、お前、帰るんだよな？」

「え、う、うん」

「茜――おかしな女だったな……」

「いやまだ目の前にいるじゃん、そういう回想は帰った後にしてくれない？」

「そうだな……しかし同じ時刻に行った方がいいだろう、」

ぼんやりと口元を見ていた。

「もう少し居ろ」

昨日の、夕日の影から見えたその微笑。

柔らかで品があって、すごく安心する。

男ってこういう風に笑えるんだな……

＊　＊　＊

夕刻、葵神社。

「で、どうやって帰るのかな？」

「神頼みしかねぇだろう」

「ですよね」

天は手を柄杓で洗って、鐘の真ん前に行く。

私も習って手を洗い隣に並んだ。

「……また来れるのかな」

「また来るのか？」

ぽつりと呟いた声に返答。
心地よい低さのその声も、もう懐かしい。
「いや、別に夭に会いたい訳じゃないんだけどね、会わせたい人がいるっていうか」
「『葉那』の話か」
その声でその名前が呼ばれたのに、なんだかつきんとした。
「茜は綺麗だ」
「え、」
なんだ、なんだなんだ、なんだとお！
「花もいいが茜の空も美しい」
「ああ、名前ね。はい、勿体ない名を頂きました」
橙色の色見上げて、ゆるゆる浮かぶ雲のように穏やかな
「自信を持て」
その微笑。

夕日が沈むのは、早い。天は上からその空を紫色に塗り替えていく。
天は見上げていた空から向き直り、鐘の紐を握った。

カラン、カラン

境内に響く音色。

――カラン、カラン……

反響する木霊。

……カラン、カラン……

それは、ずっと遠くの方から――

「お前を待っている奴がいる」

ふ、と笑ったその人に、手を伸ばす。
手が触れ合ったと思った刹那、ぶわり、と地面が揺れた。

ぶわり、ぶわり、ぶわぶわ。
揺れているのはまた地面か脳みそか、今私はあなたにどう映っているの？

――――離したくない。

ぎゅ、とその手を握った。
「まだ、いたい……！　あたし、夭のこと――」
「気安く触るな」
離された、その手。
体が浮くような浮遊感。
彼に浮かんだその表情。
――ああ、分かった。
それは微妙な、微妙だけれど。
「――照れんなって！」
笑ってみせたその顔に、今度は微笑が返される。
「けど今度来た時は、地面に落とす前に一言言ってほしい！！」
もう一度、抱きとめてくれた時は――
「覚えておく」
くすりと笑った。

消えていく。消えていく――

――最後に見えたのは、それは綺麗な

茜色の微笑みでした――――

『間違いじゃねぇよ』

～エピローグ～　ありがとう、カミサマ

――アカネ、アカネ……

……アカネ――――

「茜！」

はっと目を覚ます。

「葉ちゃん！？」

「もう……やっと目ぇ覚ましたあ」

呆れたような、ほっとしたような。

「寝て……？――あたし、どれくらい寝てた？」

「小一時間」

まじか。

危惧していたが、やはり寝落ちか。

「お祈り終わって、目を開けたら茜がぐっすり寝てんだもん。なんで！？　と思ったよ」

そりゃ確かにびっくりだわ。

目を開けたら隣の人が眠りこけていました、とか。
なんで！？
だよね。

「遂に茜になにかの天罰が下ったのかと思って、前言撤回してお祈りしなおしちゃったよ。茜を戻してください、て。それで茜が起きたの。まあ、ただ鐘の音で目を覚ましたのかもしれないけど。でもほんとに心配したんだから、睡眠妨害なんて言わないでよね」

言わないよ。だって、葉那のおかげだもん。

「ねぇ葉那……」
「ん？」

『自信を持て』

「あたしも恋、しちゃおっかな！」

「なにそれーー」
くすくすと笑う。

「どんな夢見てたの？　すっごい百面相してたよ。――でも、すっごい楽しそうだった！」

「いやあ、悪いねぇ。ほんとは葉那の夢のはずだったんだけど」
てへへと頭をかく。

「なにそれー」

「ようちゃん、ね……」

私の親友は――
さらさらの黒い髪。切れ長で綺麗な黒の瞳。
上品な口元。
微妙に毒舌で、天然で、だけど優しい。
その口元――

「ねぇ、見て。綺麗だよねぇ」
親友が夕空を見上げて微笑む。

夢の中の現実は
キスや抱きしめるどころか告白さえもできない
現実の中の夢で
ただ、一瞬触れただけ

それが一晩なのか小一時間なのか、分からないけれど

「茜って、大好き」
「――あたしも、好きだよ」

ねえ、どこかで繋がっているんだよね

アカネ差すキミに――――

～エピローグ～　ありがとう、カミサマ（後書き）

携帯小説に倣って書いてみましたが、そのノリ、改行、言葉、構成の仕方……真に深淵です。ちなみに登場人物は連載『続瑠璃色紀』より出張。最後までお付き合いいただき誠に有難うございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0802q/

アカネ差すキミ

2011年1月10日22時43分発行